学童疎開の思い出

―手紙の交換―

乙 部　軒 堂（応化会）

太平洋戦争の末期、都会の小学校高学年の学童は、戦災を避けるため集団で疎開して授業を受けていた。その頃私は小学校の４年生で、長野市内に住んでいた。比較的安全な地域だったので、私たちは疎開する方でなく、集団で疎開してきた学童を受け入れる方の側だった。その期間は記憶が確かではないが、昭和２０年春ごろから夏ごろまでの半年間ぐらいだったのではないだろうか。

小学校は疎開の学童を受け入れるために、校舎は午前の授業と午後の授業の２部制になった。私たちが午前に教室を使うと、午後は疎開の子たちが使い、またそれが入れ替わったりしたと思う。自分の机も私たちと、疎開の子が半日交代で使っていた。

ある時、疎開の子の忘れ物が私の机の中にあった。その忘れ物は何だったか覚えてないが、文房具だったように思う。そこで私は「無くなるといけないので忘れないように」と、メモを添えておいた。翌日机の中には、感謝の言葉のメモがあった。女の子からのようだということも分かった。私たちの教室は、女の子の教室にもなっていたらしい。よほど嬉しかったのだろう、私はそのメモを得意気に周りのクラスメートに見せた。それからである。忘れ物も用もないのに、メッセージだけを机の中に残す者が出て来た。そしてまた返事のメッセージも貰ったようだ。

数日後、担任の先生が神妙な顔をして言い始めた。「君たちの中には疎開の女の子と、手紙の交換をしている者が居るらしい」と。その頃は戦時中、男女席を同じうせずの厳しい時代だから、職員室で問題になったらしい。私は直ぐ挙手をし起立して、この件のいきさつを先生に説明した。私が発端だったことをお詫びして、この事件は問題とならず一件落着した。以後も問題は起こらなかったようだ。

今思うと一寸甘酸っぱい、懐かしい思い出である。